
輪廻

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻

【Nコード】

N7312K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

そんな…私は歯が痛いから。

歯が痛い。

だから、歯医者に行くことにした。

その日は雨が朝から降っていて、電話をすると2時の予約が取れた。子供を保育園に預けているから4時には帰ってこないと。

駅前のビルの3階に歯医者があった。ここに来るようになって4年。今日は春休みということで、小学生の患者さんが多い。キーンというあの神経に触るような音がたまらない。

「掛川さん、掛川早苗さん」

「はい」

通されたいつもの診察室。マスクをしている先生はこの若先生、和田冬馬先生だ。大先生はもうおじいちゃんだけど、冬馬先生は35歳。私より1つ下。いつも通っているジムで時々会う先生。少し話をして年齢も聞いた。彼は近畿の方で勤めていたが、もう親が帰って手伝えということで帰って来たという。いずれ、後を継ぐのだろう。お子さんも一緒に保育園で、奥さんは歯科の受付に座っている。綺麗で指が細く私の節くれだった指とはえらい違いだ。

「どうしましたか？」

「ええ、昨日から左の上の歯が痛いんです」

「うーん、どれどれ。ここですか」

「いたたた…そこです」

「虫歯になってるか、レントゲンを撮ってみます」

レントゲン室で撮るとすぐに目の前の画面に映しだされる。

「別に虫歯はないですねえ。知覚過敏かなあ」

「それって、治りますか」

「ええ、硬い歯ブラシで磨き過ぎでしょう。もっと柔らかいものでこの歯磨きに変えたらいいですよ」

歯垢や歯石を取り除いてもらって、虫歯ではないということに安

堵した。だが、歯石を取り除くのは思いのほか痛い。思わず口がどんどん閉じていく。若先生は

「もう少し開けてくれないと、唇をけがしますよ」

受付で物が落ちる音がした。奥さんが鉛筆立てを落としてしまったらしい。

でも、歯医者者って嫌い。いやいや口を開けて40分。済んだ時には肩がコリコリになってしまった。怖いから体を硬直させているからだ。

受付で奥さんが

「痛かったですか。次で終わりと思いますが、予約をいつにしましょうか。」

「ええ、来週のこの時間に」

「わかりました。明日は保育園の遠足ですね。行かれますか」

「ええ、今日はお弁当の材料を買いに行きます」

「お菓子もですね」

若先生の奥さんは気さくで、話しやすい人だ。にっこり笑って話すので、お年寄りの方の評判もすこぶるいい。

翌日、快晴に恵まれ、息子の良太を連れて保育園に向かう。息子は張り切っている。そこへ、和田先生の奥様と真麻ちゃん。大きな貸切バスが待っていた。

「おはようございます」

「おはようございます」

「歯はいかがです？」

「ええ、痛くないです。よかった」

「そうですか。主人に伝えておきます」

だが、今日は日焼けするからと、パーカーを羽織り、首には麻のスカーフ。白のコットンパンツにボーダー柄のTシャツ。さらに色の薄いサングラス。

「完全武装ですね」

「ええ」

につこり笑う彼女と一緒にバスの席に乗る。子供は2人で仲良く座っている。

風を入れようと窓を開けると、彼女のスカーフがほどけて床に落ちた。首に残る2筋の線。今のはなんだろうと気になったが、聞くことは憚られた。彼女は隠すようにパーカーの前を合わせ、首にすぐ巻いたスカーフ。お互いにふと口をつぐんでしまった。話さないとと思うが言葉も浮かんでこない。

「隠してきたつもりだったんですけど」

「は？」

「この傷、昨日喧嘩したんです」

「でも、そんなキズ、どうしたんですか」

失礼とは思ったが聞いてしまった。彼女は

「あの人はとても優しい人ですけど、一度怒りだすと手がつけられなくなつて」

思わず弁当の入ったトートバッグを落としそうになった。首を絞めるって、そんなこと、ドラマの中の話だと思っていた。彼女はパーカーの腕を少しまくると、青いあざがいくつもあった。

「奥さん、それは危ないです。一度ご主人のことをお父様に相談されたら」

「知ってます」

「ええっ！ 一体いつからなんですか」

「結婚直後から」

「なぜですか」

「ええ、やきもち焼きなんです。優しいし普段はとても気配りの出来る人ですから、みんなに羨ましがられて。私も幸せでした。いえ、今も幸せではあるんですけど。こんなことさえないければ」

「そうですね、私も素敵な先生だと思っていましたから」

そう言つと、彼女はやっぱりとつぶやいた。

そんな夫婦の秘密を私に話したのはなぜだろうか。でも、根掘り葉掘り聞くことは出来ないし、思い悩んでる間に遊園地に着いた。

子供たちは元気に走り回り、親たちも久しぶりの遊園地と一緒に
はしゃぐような気持ちになった。彼女はその後キズについては一切
言わなかった。お弁当も一緒に食べて、楽しいひとときを過ごした。
彼女の気持ちが晴れればいいと心の底から思った。

その日、私はアスレに行ったが、若先生とは挨拶しか交わせな
かった。

だが、翌日、保育園に送って行くと、園長先生がバタバタしてい
た。

「真麻ちゃんのお母さんが自殺ですって。今、ご主人から電話があ
ったわ。しばらく休むって」

思わず聞いたその話。

『違う殺されたんだ、私は真実を知っている』

あの奥さんは痛々しい話を聞かせてくれた。決して許してはいけ
ない、若先生を野放しにしてはいけない。あんな乱暴な人。絶対に
許してはダメ。

意を決して警察に行った。夫はよその夫婦のことだからと止めた
が。

警察は自殺で処理するようだったが、彼女の体にいくつか傷があ
ることを調べていた。これらの打撲について、夫は妻が自傷行為が
あったと語ったという。まさか、そんなはずはないと私は必死で訴
えた。若先生は警察に逮捕された。彼女の体にあった傷と、された
という私への訴えが実を結んだのだ。

あれから1カ月。真麻ちゃんと良太が遊んでる。子供に罪はない。
迎えに行ったときに園庭で遊ぶ二人を見ると、真麻ちゃんが棒で
自分を打ちつけている。あわてて止めると、縄跳びを持ってきて首
を絞めている。もちろん自分の首を。びっくりして叱った。

「ママはやってたよ。パパがアスレに行った日はいつも」

そんな、そんなこと……。アスレに行ったときに話してたのは私。
でも、話したただけなのに。彼女の異常な嫉妬はやがて自傷行為に結
びつく。情けない自分に対して。そして、誤って自死したのか。

私は夫と警察に行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7312k/>

輪廻

2010年10月8日13時07分発行